

# 各教科(校種別)の授業研究を通じた教職・教科教育・教科内容

## の連携・教員協働のあり方に関する研究(3)

### —「教職実践演習」における取り組みを通して—

研究代表者	三村 真弓 (音楽文化教育学講座)
研究分担者	山内 規嗣 (学習開発学講座)
	中村 和世 (初等カリキュラム開発講座)
	大後戸一樹 (初等カリキュラム開発講座)
	網本 貴一 (自然システム教育学講座)
	木下 博義 (自然システム教育学講座)
	佐藤 大志 (国語文化教育学講座)
	間瀬 茂夫 (国語文化教育学講座)
	枝川 一也 (音楽文化教育学講座)
	森田 愛子 (心理学講座)

## I 研究の背景と目的

### 1. 研究の背景

近年、文部科学省は、教員養成改革に関する様々な課題を提示してきた。2006年7月には、「教科に関する科目」や「教職に関する科目」の趣旨が十分理解されていないこと、科目間の内容の整合性・連続性が図られていないこと等を指摘している<sup>1)</sup>。また、2007年3月には、教員養成課程における教職、教科教育、教科専門<sup>2)</sup>という枠組みの在り方を見直す必要性を指摘している<sup>3)</sup>。さらに、2011年10月には、教員養成課程における教職専門と教科専門の溝を埋めるため、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」を架橋する「教科内容構成に関する科目」(仮称)の新設等の改革の方向性を示した<sup>4)</sup>。このような課題に対峙するべく、教員養成大学において、教科教育と教科専門を架橋するカリキュラム開発等の研究が行われてきた<sup>5)</sup>。

### 2. 研究の目的

本研究者たちは、質の高い教員養成をめざし、教職・教科教育・教科内容の教員が、それぞれの視点から小学校・中学校・高校の各校種・各教科の授業研究を行い、①教職・教科教育・教科内容の架橋の原理を探求する、②それを基盤として、教科横断的に、ある程度共通した計画を立案する、③それに基づいて、各教科(校種)の特性に応じた独自の連携方法を模索する、④教職実践演習において、3者連携の可能性を探り、その方法を検討する、の4点を目的として、2年間研究を進めてきた。

今年度は、「教職と教科教育と教科内容の3者が教員養成課程の授業においてどのように連携するのか」、「連携によってどのような成果を挙げることができたのか」を、「教職実践演習」における取り組みを通して実証的に明らかにすることを研究の目的とする。

(三村真弓\*)

## Ⅱ 「教職実践演習」における取り組み

### 1. 道徳の時間

#### (1) 研究目的

本研究は、初等教育教員養成コースの「教職実践演習」において、道徳の時間の授業づくりにおける教職・教科教育・教科内容の3要素の位置づけと関連性を受講生に理解させる学習内容を開発して、その効果を検証することを目的とする。

#### (2) 研究方法

道徳教育に直接にかかわるコース開講科目は「道徳教育指導法」の1必修科目のみであり、この科目において教科教育と教科内容を教職科目の視点から関連づけた講義を行っている。ただしその主たる要点は児童の発達段階や児童・学級の実態に即した学習指導方法・学習計画の理解に置かれており、例えば学習内容としての価値項目についての理解や、その理解に基づく学習指導案の立案については、十分な時間を確保することができていない。この状況をふまえて、本研究では、初等教育教員養成コースの7・8 Semesterに開講されている「教職実践演習」15回のうち、道徳教育に割り当てられた1回に関して、以下のとおり授業を行った。

受講学生に対する授業前調査として、まず、表1に示される質問項目による5段階評価アンケートを実施した。次に、道徳の時間の学習指導案を事例として提示し、その内容についての評価と改善策について自由に記述させた。その後、学生の意見についての相互交流をもとに講評を行い、道徳教育の基本的視点を確認するとともに、学習内容と学習指導法の連関について、特に後者にかかわる児童の発達段階・学級の実態について学生が適切に配慮している一方、前者にかかわる価値項目の理解についていっそう深化させる必要があることを指摘した。その後、価値項目の解釈と学習指導案改善への具体的適用について講義し、質疑応答を行った。最後に、本講義の学習を終えての気づきを自由記述させた。

#### (3) 実践演習前に実施したアンケートの結果と考察

表1 授業前に実施したアンケートの分析結果

質問項目		最小値	最大値	平均値	標準偏差
教科内容	1. 道徳の時間について、指導する学習の内容（小学校）を理解している。	2.0	5.0	3.49	0.91
	2. 「主として自分自身に関わること」について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な知識を習得している。	1.0	4.0	2.30	0.80
	3. 「主として他の人とのかわりに関わること」について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な知識を習得している。	1.0	4.0	2.21	0.74
	4. 「主として自然や崇高なもののかかわりに関わること」について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な知識を習得している。	1.0	4.0	2.19	0.70
	5. 「主として集団や社会とのかわりに関わること」について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な知識を習得している。	1.0	4.0	2.26	0.79
指	6. 指導の意図が明確な学習指導案を作成している。	1.0	5.0	3.40	1.05
	7. 児童の感じ方や考え方を引き出すような発問をしている。	1.0	5.0	3.35	1.02
	8. 構造化された板書をしている。	1.0	5.0	4.02	4.79
	9. 児童の関心・意欲を引き出す指導をしている。	1.0	5.0	3.33	0.92

導 方 法	10. 児童の自己観察・相互観察を促す指導をしている。	1.0	4.0	2.98	0.91
	11. 児童の道徳的な心情を養う指導をしている。	1.0	4.0	3.33	0.92
	12. 児童の道徳的な判断力を養う指導をしている。	1.0	5.0	3.16	1.02
	13. 児童の道徳的な実践意欲と態度を養う指導をしている。	1.0	5.0	2.98	1.01
	14. めあてとまとめが一致する授業を展開している。	1.0	5.0	3.58	0.96
	15. 児童の学習状況を的確に評価している。	1.0	4.0	2.91	0.78
児 童 指 導	16. 自分が気づいたこと・わかったことを、ワークシートに書かせている。	2.0	5.0	3.95	0.84
	17. 自分のことは自分の意思で決めさせている。	2.0	5.0	3.74	0.79
	18. 自分の考えをみんなの前で発表させている。	3.0	5.0	3.91	0.75
	19. 一人ひとりが活動に参加できるように、役割分担をさせている。	1.0	5.0	3.12	1.07
	20. 「自分はみんなの役に立っている」と実感できる活動を取り入れている。	1.0	5.0	2.93	1.10
	21. 児童のよりどころを見つけ、評価している。	2.0	5.0	3.88	0.98
	22. お互いのよさを認め合う活動を取り入れている。	2.0	5.0	3.70	0.89
	23. お互いに学び合う雰囲気づくりをしている。	1.0	5.0	3.72	0.85
	24. 児童の発表を共感的に受け入れている（うなずき・相づちなど）。	2.0	5.0	4.30	0.67
総 合	25. 道徳の時間の内容、指導の方法、児童指導を総合的に考えながら、道徳の時間の学習指導を計画、実施、評価、改善している。	1.0	5.0	3.07	0.99

#### （４）結果と考察

授業前に実施したアンケート結果において、平均値が3.0を下回る項目は、2, 3, 4, 5, 10, 13, 15, 20であった。このうち最初の4項目は道徳教育の内容理解に関するものであり、きわだって低い値となっている。受講学生が児童に指導する学習内容について十分な理解を有していないという自己評価が、ここに示されている。自由記述欄でも、児童の発言が自分の学習指導案で予想した展開から外れる際の対応が分からないので自由に発言させることが不安であるという意見や、児童の発言にその場で評価を行いにくいという意見、などが見られた。これらもまた共通する原因の1つとして、指導すべき価値項目について学生の理解が曖昧な点が挙げられる。逆にワークシート利用についての項目16の値が高いのは、児童の記述内容に対する教師からの評価・フィードバックを行わないかぎりでのものであり、また項目24も受容的風土への配慮というだけでなく、教師側からの批判的評価やゆさぶりが困難なために結果としてすべての意見を肯定するほかなくなっているという問題の表れと見ることもできる。配付した学習指導案事例の評価ならびに改善策の提示については、「道徳の時間の内容」の観点からはほぼ全員が批判しておらず、これに対して「学習指導の方法」と「児童理解」の観点からは逆にほぼ全員が何らかの問題点と改善策を記述していた。

授業後の自由記述では、配付した学習指導案事例の「道徳教育の内容」における問題点について授業を通じて理解できたという感想のほか、児童の多様な意見を教師が受け止めて授業に反映させ、学習指導法をいっそう改善していくために、まず価値項目理解や教材研究の深化が不可欠であるということへの気づきを、43名中14名が記していた。この気づきは、いわゆる教科教育と教科内容の視点を、さらに発達段階や人間形成の理念もあわせれば教職の視点をも、統合して捉えていくために有効なものと考えられる。ただし、こ

のことを記したのは受講学生のうち3分の1程度にとどまっており、またその深化を自身が今後行っていけるかどうかについての不安をあわせて記す学生も存在した。その一方で、多様な児童への対応方法や学級の実態把握の手段などについての関心は受講学生のほぼ全員に見られており、それらの重要性は疑いないところであるものの、道徳教育の内容への関心が後景に退く傾向は授業後も確認された。

以上の結果から、本研究の成果と課題を挙げる。まず成果としては、対象学生が道徳教育について抱く関心と問題意識を明確化することによって、学生の実態に即したフォローアップの要点が把握できたことである。また、この把握に基づいた授業実施によって、各学生が教員としての資質能力向上のための観点を、道徳教育における価値項目理解の深化という課題のうちに発見する機会を提供することができた。しかし、1回の授業時間内において、いっそうの理解の深化や学習指導案への適用方法を、より具体的・多角的に指導することはできなかった。教科内容・教科教育・教職のさらなる統合のためには、今回の成果とその限界をふまえて「道徳教育指導法」の改善に反映させ、「教職実践演習」ならびに小学校教育実習や他講義科目との関連性を高めていく必要があり、これを今後の課題として検討していきたい。(山内規嗣\*)

## 2. 図画工作

### (1) 研究目的

本研究は、初等教育教員養成コースの「教職実践演習」において、図画工作科の授業づくりにおける教職・教科教育・教科内容の3要素の位置づけと関連性を受講生に理解させる学習内容を開発して、その効果を検証することを目的とする。

### (2) 研究方法

教職・教科教育・教科内容の専門教員の協働による授業開発の必要性に示される考え方にみられるように、教員養成コースに所属する学生の授業づくりの能力を高めるためには、実際の教室の場における学習指導において、教職・教科教育・教科内容の3つの要素が子どもの成長のためにどのように位置づけられているのかを理解させる授業を提供する必要がある。そこで、本研究では、初等教育教員養成コースの7・8 Semesterに開講されている「教職実践演習」の15回のうち、図画工作科に割り当てられた1回に関して、以下の内容による授業を実施した。

図画工作科の今日的課題を図1のようなパワーポイント資料を用いて提示し、課題に対応するために公立小学校で開発された授業のビデオを視聴させた。ビデオ視聴の後、教職・教科教育・教科内容のそれぞれの要素が、学習指導計画、及び実際の学習指導の中でどのように位置づけられているのかを4～5人のグループに分けて具体的に話し合わせ、話し合いの内容を全体で共有し、授業づくりにおける3要素の関連性についてまとめと確認を行った。

図1のような授業内容による効果を測るために、受講生32名に対して、表2に示される質問項目によるアンケートを5件法によって授業の前後で実施するとともに、授業を通して新しく気づいたことを自由記述させ、その内容を分析した。



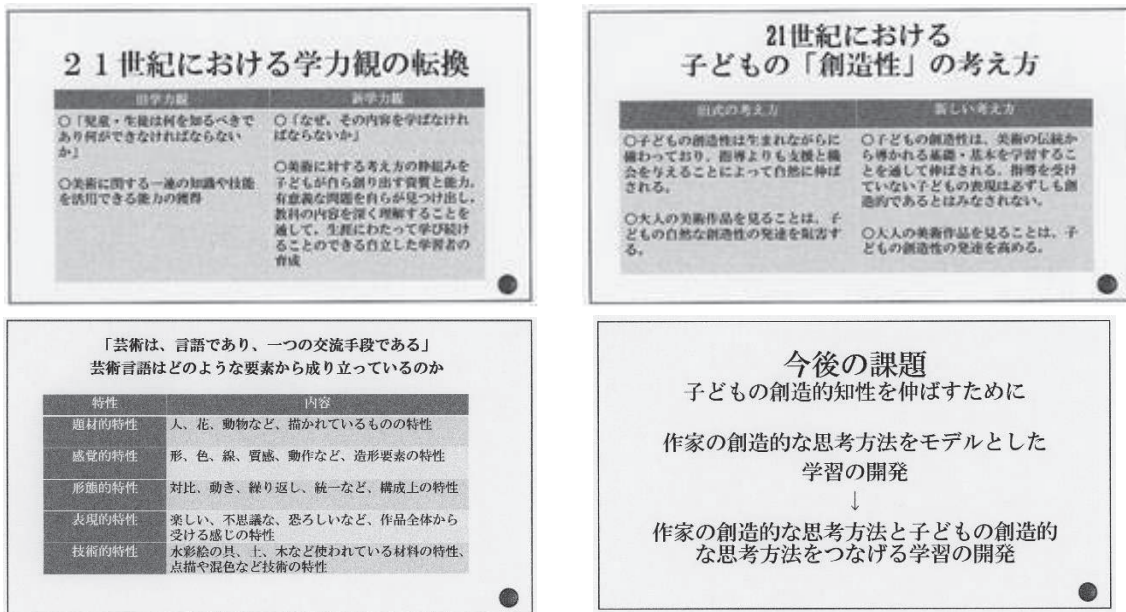


図1 授業で提示したパワーポイント資料の一部

(3) アンケートの結果

表2 授業の前後で実施したアンケートの分析結果

質問項目		授業前				授業後			
		最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差
教科内容	1. 図画工作科について、指導する学習の内容を理解している。	1.0	4.0	3.2188	.97499	1.0	4.0	3.0667	.94443
	2. 「表現」領域について、小学校で指導する学習の内容よりも専門的な内容を理解している。	1.0	4.0	2.0000	.95038	1.0	4.0	2.3000	.95231
	3. 「鑑賞」領域について、小学校で指導する学習の内容よりも専門的な内容を理解している。	1.0	4.0	2.1563	.91966	1.0	4.0	2.3000	.87691
指導方法	4. 指導の意図が明確な学習指導案を作成している。	1.0	5.0	3.6250	.97551	2.0	5.0	3.4667	.86037
	5. 児童の感じ方・考え方を引き出すような発問をしている。	1.0	5.0	3.2813	.99139	1.0	5.0	3.6333	.85029
	6. 構造化した板書をしている。	1.0	5.0	3.2188	1.06965	1.0	5.0	3.1333	1.00801
	7. 児童の関心・意欲を引き出す指導をしている。	1.0	5.0	3.7500	.91581	1.0	5.0	3.5667	.85836
	8. 児童の想像力・創造力の働きを促す指導をしている。	1.0	5.0	3.4375	.94826	1.0	5.0	3.4333	.77385
	9. 児童に表現・鑑賞の知識・技能を身につけさせる指導をしている。	1.0	4.0	2.7812	1.00753	1.0	4.0	3.0000	.83045
	10. 児童に知識を身につけさせる指導をしている。	1.0	5.0	2.6250	1.00803	1.0	5.0	2.8000	.96132
	11. めあてとまとめが一致する授業を展開している。	1.0	5.0	3.4688	1.04679	1.0	5.0	3.6333	.92786
	12. 児童の学習状況を的確に評価している。	1.0	4.0	2.9063	1.14608	1.0	5.0	3.0667	1.01483
	児童指導	13. 自分が気づいたこと・わかったことを、ワークシートに書かせている。	1.0	5.0	3.3125	1.06066	1.0	5.0	3.6333
14. 自分のことは自分の意思で決めさせている。		1.0	5.0	3.4688	.94985	1.0	5.0	3.8000	.92476
15. 自分の考えをみんなの前で発表させている。		1.0	5.0	3.6562	.74528	1.0	5.0	3.8000	.92476
16. 「自分はみんなの役に立っている」と実感できる活動を取り入れている。		1.0	4.0	2.7188	.95830	1.0	4.0	2.9000	.75886
17. 児童のよいところを見つけ、評価している。		1.0	5.0	3.9375	.87759	1.0	5.0	3.8000	.84690
18. お互いのよさを認め合う活動を取り入れている。		1.0	5.0	3.8437	.84660	1.0	5.0	3.7000	.91539
19. お互いに学び合う雰囲気づくりをしている。		1.0	5.0	3.7188	.77186	1.0	5.0	3.7000	.87691

	20. 児童の発表を共感的に受け入れている（うなずき・相づちなど）。	1.0	5.0	4.0625	.87759	1.0	5.0	4.0667	.94443
	21. 児童の学習状況を的確に評価している。	1.0	4.0	2.8437	.95409	1.0	5.0	3.2333	1.04000
総合	22. 教科の内容、指導の方法、児童指導を総合的に考えながら、図画工作科の学習指導を計画、実施、評価、改善している。	1.0	4.0	2.5000	.95038	1.0	4.0	3.0667	.86834

#### （４）考察

授業前に実施したアンケート結果において、平均値が 3.0 を下回る項目は、2, 3, 9, 10, 12, 16, 21, 22 であったが、授業後ではこれらの項目に関する平均値が高くなったことから、実施された授業内容は授業づくりにおける教職、教科内容、教科教育の 3 要素の位置づけと関連性を受講生に理解させるためにある程度の効果があったと言える。このことは、自由記述において、「教職・教科内容・教科教育の観点別による授業ビデオに関する話し合い」、「学習指導の方法が具体的に分かる授業ビデオの視聴」、「今日的課題に関する講義」によって新しい気づきが促されたことを受講生が記していることから確認される。しかし、授業前後のアンケート結果において、最小値が 1.0 である項目を見れば、変化がない受講生が残されていることが分かり、そのような学生に対してどのような指導を行っていくかが今後の課題として示される。（中村和世\*）

### 3. 体育

#### （１）研究目的

本研究は、初等教育教員養成コースの「教職実践演習」において、体育科の授業づくりにおける教職・教科教育・教科内容の 3 要素の位置づけと関連性を受講生に理解させる学習内容を開発して、その効果を検証することを目的とする。

#### （２）研究方法

小学校体育科の内容は、6つの運動領域（体づくり運動、器械運動、陸上運動、水泳、ボール運動、表現運動）と保健領域で構成されている。このうち、骨折等の大きな怪我につながることもある器械運動は、実際の現場に出た際の指導法に学生が不安を感じやすい運動領域である。しかしながら、技の系統性が明確で、比較的指導のポイントがわかりやすく、また児童にとっても運動技能の伸びが実感できるため、器械運動の指導について理解を深め、実践力を高めることは重要であるといえる。そこで、本研究では、初等教育教員養成コースの 7・8 セメスターに開講されている「教職実践演習」の 15 回のうち、体育科に割り当てられた 1 回に関して、特に器械運動に焦点をあてた授業を実施した。

授業の冒頭では、学生を対象として表 3 に示された質問項目によるアンケートを 5 件法によって実施した。その後、小学校授業のビデオを視聴しながら、気づいたことを自由記述させた。視聴させた対象授業は、小学校 5 年生で実施された「首はね跳び」（跳び箱運動）である。まず学習指導案を配付し、指導計画をもとに単元の全体像と本時の位置づけについて説明を行った後、対象授業のビデオを視聴させた。視聴させたのは、本時の学習課題である「首はね跳び」の補助運動である「台上前転」を、1 人ずつ試技をしている 10 分間のビデオ映像である。指導者の意図として、「首はね跳び」の練習を行う大前提として、中学年で獲得していた「台上前転」の技能の確認を 38 名全員に対して行う必要性があったことを補足説明した。このビデオを視聴しながら、「教科内容」、「指導方法」、「児童理解」の

3観点での気づきをプリントに自由記述させた。

その後、約10名のグループに分かれ、互いに指導者として補助をしながら40分間の「台上前転」の実技練習を行った。そして最後に、再度同じ小学校授業のビデオを視聴させ、新たな気づきを書き加えさせた。この記述の際には、最初の記述と区別できるように指示した。回収された33名のアンケート、及び最初と最後の記述内容を分析対象とすることで、実施した授業の成果を検討した。

### (3) 結果と考察

表3 授業前に実施したアンケートの分析結果

質問項目		最小値	最大値	平均値	標準偏差
教科 内容	1. 体育科について、指導する学習の内容（小学校）を理解している。	1.00	5.00	3.45	1.05
	2. 体づくり運動領域について指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な内容を理解している。	1.00	4.00	2.12	0.77
	3. 器械運動領域について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な内容を理解している。	1.00	4.00	2.39	0.95
	4. 陸上運動領域について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な内容を理解している。	1.00	4.00	2.15	0.82
	5. 水泳領域について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な内容を理解している。	1.00	5.00	2.73	0.96
	6. ボール運動領域について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な内容を理解している。	1.00	4.00	2.70	0.94
	7. 表現運動領域について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な内容を理解している。	1.00	4.00	2.15	0.96
	8. 保健領域について、指導する学習の内容（小学校）よりも専門的な内容を理解している。	1.00	4.00	2.33	0.94
指導 方法	9. 指導の意図が明確な学習指導案を作成している。	2.00	5.00	3.70	0.76
	10. 児童の感じ方や考え方を引き出すような発問をしている。	2.00	5.00	3.45	0.82
	11. 構造化した板書をしている。	1.00	5.00	3.45	0.92
	12. 児童の関心・意欲を引き出す指導をしている。	2.00	5.00	3.64	0.77
	13. 児童の自己観察・相互観察を促す指導をしている。	2.00	5.00	3.73	0.79
	14. 児童に運動観察の技能を身につけさせる指導をしている。	2.00	5.00	3.27	0.75
	15. 児童に知識を身につけさせる指導をしている。	2.00	5.00	3.21	0.81
	16. めあてとまとめが一致する授業を展開している。	2.00	5.00	3.79	0.84
	17. 児童の学習状況を的確に評価している。	1.00	5.00	2.88	0.98
児 童 理 解	18. 自分が気づいたこと・わかったことを、ワークシートに書かせている。	1.00	5.00	3.67	0.91
	19. 自分のことは自分の意思で決めさせている。	2.00	4.00	3.33	0.68
	20. 自分の考えをみんなの前で発表させている。	2.00	5.00	3.73	0.79
	21. 一人ひとりが活動に参加できるように、役割分担をさせている。	2.00	5.00	3.58	0.82
	22. 「自分はみんなの役に立っている」と実感できる活動を取り入れている。	1.00	4.00	3.00	0.85
	23. 児童のよいところを見つけ、評価している。	2.00	5.00	3.76	0.85
	24. お互いのよさを認め合う活動を取り入れている。	2.00	5.00	3.61	0.92

25. お互いに学び合う雰囲気づくりをしている。	2.00	5.00	3.79	0.69
26. 児童の発表を共感的に受け入れている（うなずき・相づちなど）。	1.00	5.00	4.03	0.90

授業前に実施したアンケート結果において、平均値が3.0を下回る項目は、2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 17の8項目であった。このうち、17を除く7項目は「教科内容」であり、「指導方法」「児童理解」に関する項目に比べて低い値であった。対象学生は、「指導方法」や「児童理解」について一定の実践力を持ち合わせていると判断しながらも、「教科内容」については、各運動領域の「専門的な内容」についての理解に自信がない様子が窺えた。

次に、指導案の解説や実技練習を経た後のビデオ視聴によって新たに気づいた内容には、3観点別に次のような傾向がみられた。

「教科内容」では、「膝を伸ばすように意思させる」、「ネックスプリングで足を振り子にして回転のタイミングを指導」など技の系統性や技術ポイントに関する内容や、「台上前転とネックスプリングの補助の違い」、「どの部分を頭に当ててしまうのかの傾向を知って補助」など技の特徴を理解した上での補助の仕方に関する内容を、19名が書き加えた。「指導方法」では、「必ず成功体験をさせる」、「できるかも、で授業を終える」などの児童の学習意欲を引き出す方法や、「横に並ばせることで、他の児童を横から見ることができる」、「子どもたちが友だちの技を見て判断できている」、「できた形をイメージしながら、他の子の姿を見る」などの観察場面での手立ての工夫に関する内容を、31名が書き加えた。「児童理解」では、「違う話をしている子がいない」、「1人1人の試技をみんなが見る」という学習規律や、「失敗を恐れない学級づくり」、「児童の信頼関係」、「失敗を受け入れるクラスの雰囲気」などの学級の雰囲気に関する内容を、22名が書き加えた。

対象学生が新たに記述した内容は、「指導方法」に関する内容が多い傾向がみられたが、具体的な記述内容からは3観点に分けることができない事例も多くみられた。たとえば、「児童がどのようなポイントを修正してきたか、気づけるように教師が知識を持っておく」という気づきは、「教科内容」と「児童理解」の両立が必要である。また、「誰かの失敗を、全員の指導のポイントにしている」という気づきは、「児童理解」に現れた学級の雰囲気の中かで、「教科内容」にもとづく教材理解を活用した「指導方法」であるといえる。ただし、受講生がこれらの関連をどのようにとらえているのかは不明である。

以上のことから、本研究の成果を次のように挙げることができる。

本研究で対象とした学生は、「教科内容」に関する専門的な知識は足りないと感じているのに対して、「指導方法」や「児童理解」については理解できるととらえていると思われた。その学生に対して、「学習指導案に基づく指導者の意図の解説」、「ビデオ視聴による授業観察」、「互いに指導者と学習者の役割を行う実技練習」によって、「教科内容」「指導方法」「児童理解」の3観点での新たな気づきを生み出すことはできたと考えられる。しかしながら、この3観点は単独で高まるものではなく、相互に補完し合って高まるものであるという点について本授業では言及できておらず、また受講生がどのように認識しているかについても考察できていない。この点については今後の課題としたい。（大後戸一樹\*）

## 4. 理科

### (1) 研究目的



本研究は、中・高等学校の理科教員を目指す学生（教育学部自然系コース、理学部、生物生産学部、総合科学部）を対象とした「教職実践演習（中高・理科）」において、授業づくりの要素となる教職・教科教育・教科内容の位置づけと関連性を受講生に理解させる指導を行い、その効果を検証することを目的とする。

## （２）授業概要

「教職実践演習（中高・理科）」の教科に関する演習回（第7～14回）では、受講生を大きく4つのグループに分け、物理・化学・生物・地学の4分野を2時間ずつローテーションしながら、理科の教科内容と教科教育に関するフォローアップの演習を実施した。各分野によって態様は異なるが、おおよそ以下に述べる要領で実施された。1時限に、あらかじめ指定された単元に関して受講生が各自で作成した学習指導案をもちより、グループワークを通じて、自身の教科指導に関する現状を認識して課題を見だし、指導案の改善を試みた。2時限に、代表者1名が当該単元の模擬授業を行った後、意図された授業が展開されたかを「教科内容」「指導方法」「生徒指導」の3つの観点に着目しながら全員で検討した。一連の演習指導において、理科内容学と理科教育学の教員が協働し、「教科内容」「教科教育」それぞれの専門性を活かした指導が行われた。

## （３）研究方法

調査は、「教職実践演習（中高・理科）」の事前及び事後に当たる2014年11月と2015年2月に、協力が得られた教育学部の受講生25名を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙は、本共同研究プロジェクトのメンバーで協議して作成したものであり、大きく2つから構成されている。1つは「教科内容」「教科指導」に関する自身の現状をアンケート調査（5件法）する内容、もう1つは当該演習で実際に行われた模擬授業をビデオで視聴しその改善点を「教科内容」「指導方法」「生徒指導」の3つの観点で自由記述させるものである。事前と事後の回答傾向を比較分析することで、演習の効果検証を行った。

## （４）結果と考察

### アンケート調査（5件法）の分析結果

事前と事後に行ったアンケート調査の結果を表4に示す。第1列は観点、第2列は質問項目、第3列は平均値（上段：事前、下段：事後）、第4列は標準偏差（上段：事前、下段：事後）、第5列は $t$ 検定の結果である。

表4 質問項目及び平均値の差

質問項目		平均値	標準偏差	$t$ 値
教科内容	1. 物理分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）を理解している。	3.96	1.02	1.41
		4.17	0.72	
	2. 化学分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）を理解している。	3.96	0.93	0.30
		4.00	0.60	
	3. 生物分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）を理解している。	3.04	0.93	1.23
		3.26	0.86	
	4. 地学分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）を理解している。	2.87	0.92	1.42
3.09		0.95		
5. 物理分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）よりも専門的な内容を理解している。	3.26	1.36	1.06	
	3.52	1.04		
6. 化学分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）よりも専門的な内容を理解している。	3.30	1.33	1.27	
	3.61	1.03		
7. 生物分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）よりも専門的な	2.39	1.16	1.99 <sup>†</sup>	

	内容を理解している。	2.78	1.13	
	8. 地学分野について、指導する学習の内容（中・高等学校）よりも専門的な内容を理解している。	2.35	1.23	0.62
教科指導	9. 指導の意図が明確な学習指導案を作成している。	4.00	0.74	2.02 <sup>†</sup>
		4.26	0.69	
	10. 生徒の考えを引き出すような発問をしている。	3.57	0.99	0.77
		3.70	0.77	
	11. 構造化した板書をしている。	3.84	0.78	0.94
		3.65	0.94	
	12. 生徒の関心・意欲を引き出す指導をしている。	3.78	0.80	0.62
		3.87	0.82	
	13. 生徒の科学的な思考を促す指導をしている。	3.48	0.85	0.90
		3.61	0.84	
	14. 生徒に観察・実験の技能を身につけさせる指導をしている。	3.48	0.79	0.89
		3.65	1.03	
	15. 生徒に知識を身につけさせる指導をしている。	3.73	0.77	1.16
		3.91	0.68	
	16. めあてとまとめが一致する授業を展開している。	4.22	0.60	1.00
		4.35	0.65	
	17. 生徒の学習状況を的確に評価している。	2.83	0.78	1.91 <sup>†</sup>
3.13		1.10		

<sup>†</sup>  $p < .10$

「教科内容」に関して、指導内容の理解に関する項目 1～4 では、物理・化学についてはほぼ 4 となっているのに対し、生物・地学では 3 程度に留まっている。これは高等学校及び大学における自身の履修状況が大きく影響している。一方、指導内容の専門性に関する項目 5～8 では、項目 1～4 よりも 0.6～0.7 低い結果になっている。これは、大学専門課程において自然科学の高度な専門性に接し、学び続ける必要性を認識している結果と捉えられる。演習の前後ですべての項目で 0.1～0.4 向上し、項目 7 については事前と事後で平均値の差に有意傾向がみられた。これは指導案作成や模擬授業などを通じて、受講生が内容理解の深化を感じたためと考えられる。

「教科指導」に関して、学習指導案作成に関する項目 9 や目標と結果の一致に関する項目 16 では 4 以上と自己評価は高い一方で、授業内における生徒指導に関する項目 10～15 については 3.5～3.8、生徒把握に関する項目 17 に至っては 3 程度に留っており、授業の中での生徒との関わり方と理解度の把握に課題を感じていることが伺える。演習の前後では、項目 13 を除く項目で 0.1～0.4 向上し、項目 9 と 17 については事前と事後で平均値の差に有意傾向がみられた。項目 9 について、教師の指導意図が明確になるような学習指導案の作成を 4 分野にわたって繰り返し指導したことにより、受講生の意識が高まった結果と考えられる。項目 17 については、模擬授業を繰り返すことにより、教師主導の授業展開から生徒の学習状況を把握した授業展開を心がけようと受講生の意識が変容したためではないかと考えられる。一方で、板書に関する項目 11 では演習の前後でおよそ 0.3 減少している。これは、模擬授業とその検討会を経て、効果的な板書をするものの難しさを再認識させられた結果であると考えられる。

#### 授業観察に関する自由記述の分析結果

事前では昨年度行われた模擬授業（対象学年：高等学校第 1 学年，単元名：生物基礎「エネルギーと代謝」，内容設定：呼吸に関する板書授業），事後では今年度行われた模擬授業

(対象学年：高等学校第3学年，単元名：化学「酸素を含む有機化合物」，内容設定：ヨードホルム反応に関する探究活動を含む授業)を，それぞれ素材とした。50分授業をそのまま視聴させた後，「教科内容」「指導方法」「生徒指導」の3つの観点に着目しながら，質問紙に改善点を自由記述させた。

「教科の内容」に関する改善点の指摘は，事前が2.2件/人に対して事後が2.0件/人であり，それほど変化しなかった。ただ事前では指導内容の不適切さを指摘する記述が比較的多く見られたのに対し，事後では授業展開に対して助言する記述が多く見られたことから，単なる教科内容に留まらず生徒の理解に沿った内容解釈が必要であるとの視点が加わってきたことを示している。「指導の方法」に関する改善点の指摘は，事前では3.8件/人あったものが，事後では2.8件/人と減少した。これは，事前での素材が板書授業であったのに対し，事後での素材が生徒実験を含む探究活動であったことに起因している。事前においては，授業展開や板書の構造的性，生徒への発問と働きかけの効果性など，授業者が一方向的に教授する板書授業によく見られる指摘が多かった。これに対し事後では，導入における授業者の教授に対する指摘は事前と同様に見られたものの，展開における生徒実験の目的の明確な指示・実験時の指導法や机間巡視の有効性・安全面への配慮，終結における実験結果の集約と結果に対するフォローアップの問題点，などの指摘が有意に増加した。「生徒指導」に関する指摘についても「指導の方法」と同様，事前の2.3件/人から事後の1.9件/人とわずかに減少した。事前の模擬授業が授業者が一方向的に教授するスタイルであり，生徒指導の場面が少ないことを指摘する記述に集中していたのに対し，事後の模擬授業は板書授業と生徒実験の両方を含むものであり，生徒への発問や実験指導の有効性に関する指摘が「指導の方法」とも重複して記述されていた。従って，これらの指摘も授業観察の対象とした授業内容に大きく影響された結果と考えられる。

事前は教授型の板書授業，事後は生徒実験を含む探究活動という，性格の全く異なる模擬授業に対する授業観察を通して，効果的な教科指導のあり方や実験時の注意事項など「教科内容」「指導方法」が強く意識されるようになったことが伺えた。同時に，理科のように知識教授に陥りやすい授業の中で生徒への働きかけがいかに重要で難しいかが多く指摘され，「生徒指導」の観点が再認識される結果となった。一方で，授業観察で取り上げた模擬授業の内容に強く依存した回答傾向となり，この分析結果をもって演習及び教科内容と教科教育の協働の成果を議論するまでには至らなかった。

#### (5) まとめ

以上の結果から，次のような成果と課題が挙げられる。「教科内容」について，受講生は自身が高等学校と大学を通じて専門的に培った分野では相当の理解を有していると自己認識している一方で，その他の分野には指導に不安を感じているようである。教科内容に関する理解は一朝一夕には身につくものではないので，わずか8回の指導でその変容を認識するのは困難であったと言える。一方で「教科指導」については，学習指導案の作成と生徒の学習状況の把握に関する項目で，受講者の意識の伸長が見られた。これらはともに，物理・化学・生物・地学の4分野で，指導案作成と模擬授業の指導を継続的かつ反芻的に行った成果であると思われる。また，教科指導の中でも生徒との関わりを重視する視点が受講生に培われており，教科指導の枠組みでの「生徒指導」の観点をどのように取り入れていくかが今後の課題の1つである。

(網本貴一\*・木下博義\*)

## 5 国語科

### (1) 研究目的

本研究は、国語文化教育系コースの「教職実践演習」において、国語科の授業づくりにおける教職・教科教育・教科内容の3要素の位置づけと関連性が受講生に理解されているのか、その効果を検証することを目的とする。

### (2) 授業概要

国語科の教職実践演習では、15回の授業のうち、前半の第2回～第6回において教職に関するフォローアップの授業を行い、後半の第7回～第14回において教科教育・教科内容に関するフォローアップの授業を行っている。教科教育・教科内容に関するフォローアップの授業では、受講生を現代文領域クラスと古典（古文・漢文）領域クラスに分け、それぞれのクラスにおいて、教科教育と教科内容の教員が協働して、授業を行った。授業では、受講者が教育実習で取り組んだ教材の指導案を再検討することによって、現状の課題を見出し、その改善案を作成することを目的とした。

### (3) 研究方法

今回の調査では、教職実践演習の受講者に協力を依頼し、第2回の授業前にアンケートとビデオによる授業観察を行い、その改善点を自由記述で記入させた。更に15回の授業を終えた後に、同一内容の授業を観察させ、再び改善点を自由記述で記入させた。アンケートの内容は教育実習をふり返って、「教科内容」「指導方法」「生徒指導」の3つの観点から、それぞれの現状と課題を把握することを目的として行った。ビデオによる授業観察は、教職実践演習の前後に同一内容の授業を観察させて、前後の記述内容を比較分析することで、実践演習の成果を検討した。事前アンケートの回収数は14名、前後の自由記述は演習後の調査に2名欠席があったため、12名の記述内容を分析対象とした。

### (4) 結果と考察

#### アンケート調査の分析結果

表5 授業前に実施したアンケートの分析結果

質問項目		最小値	最大値	平均値	標準偏差
教科内容	1. 現代文について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）に関する基本的な知識を習得している。	2	5	3.86	0.83
	2. 古典（古文）について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）に関する基本的な知識を習得している。	2	5	3.50	0.82
	3. 古典（漢文）について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）に関する基本的な知識を習得している。	2	4	3.07	0.88
	4. 現代文について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）に関する資料・情報を収集し、読解することができる。	2	5	3.93	0.70
	5. 古典（古文）について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）に関する資料・情報を収集し、読解することができる。	3	5	3.86	0.52
	6. 古典（漢文）について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）を分析し、開発することができる。	2	5	3.21	0.86



	7. 古典（古文）について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）を分析し、開発することができる。	2	5	3.50	0.82
	8. 古典（漢文）について、指導する学習の内容や教材（中・高等学校）を分析し、開発することができる。	2	5	2.93	0.96
指導方法	9. 指導の意図が明確な学習指導案を作成している。	2	5	3.64	0.81
	10. 生徒の考えを引き出すような発問をしている。	2	5	3.36	1.04
	11. 構造化した板書をしている。	2	5	3.36	1.04
	12. 生徒の関心・意欲を引き出す指導をしている。	1	5	3.07	0.96
	13. 生徒の論理的な思考を促す指導をしている。	2	4	3.36	0.81
	14. 生徒に理解や表現の技能を身につけさせる指導をしている。	1	4	2.79	1.01
	15. 生徒に国語に関する知識を身につけさせる指導をしている。	2	5	3.50	0.73
	16. 授業の目標と授業の展開やまとめが一致している。	2	5	3.50	0.82
	17. 生徒の学習状況を的確に評価している。	1	4	2.36	0.72
生徒指導	18. 自分が気づいたこと・わかったことを、ノートに書かせている。	1	5	3.50	0.98
	19. 生徒のよいところを見つけ、評価している。	1	5	3.21	1.08
	20. 「自分はみんなの役に立っている」と実感できる活動を取り入れている。	1	4	2.50	0.91
	21. 一人ひとりが活動に参加できるように、役割分担をさせている。	1	4	2.50	0.73
	22. 生徒の発表を共感的に受け入れている（うなずき・相づちなど）。	3	5	4.14	0.64
	23. お互いのよさを認め合う活動を取り入れている。	2	4	3.21	0.67
	24. お互いに学び合う雰囲気づくりをしている。	2	4	3.14	0.64
	25. 自分のことは自分の意思で決めさせている。	2	5	3.07	0.80
26. 自分の考えをみんなの前で発表させている。	3	5	4.00	0.53	

授業前に実施したアンケート結果において、平均値が 3.0 を下回る項目は、教科内容では 8，指導方法では 14・17，生徒指導では 20・21 であった。また平均値が 3.6 を上回る項目は、教科内容では 1・4・5，指導方法では 9，生徒指導では 22・26 である。

「教科内容」では、古典（漢文）の教材開発能力に関する項目 8 の平均値が低い。その他の項目でも、古典（漢文）に関する項目は平均値が低く、また現代文（1＝基本知識，4＝情報収集・読解）と古文（5＝情報収集・読解）の平均値が高いことから、教科内容では漢文の読解・分析に特に課題を抱えているようである。

「指導方法」では、14 の技能習得，17 の学習評価に関する項目の平均値が低い。一方で，13 の論理的思考力や 15 の知識習得，また 9 の学習指導と 16 の目標と結果との一致に関する平均値は高い。ここから，読解や作文指導における技能習得の指導法，及び学習の結果を踏まえて学習者を評価する方法に課題を感じていることがうかがえる。

「生徒指導」では，特に 20 の有能感につながる活動，21 の活動参加の役割分担の項目は平均値が低く，その一方で，22 の発表への共感，26 の発表機会の確保の項目は高い。ここから，学習者に発言をうながし，個々の発言を評価することはできているが，個々の学習者の活動をクラスやグループ全体に位置づける活動や学習を展開することに課題を感じているようである。

各観点の全体平均値は、「教科内容」が3.48、「指導方法」が3.21、「生徒指導」が3.25、と、全体平均値はいずれも3.0よりも高く、概して受講生の自己評価は高い。なかでも最も平均値が高いのは「教科内容」であり、授業観察の自由記述とも関連して、「教科内容」にやや偏りがちの傾向がうかがえる。

#### 授業観察に関する自由記述の分析結果

ビデオによる授業観察は、広島県内の私立高校教諭による古典の授業を素材とした。調査時間の都合により、60分授業の前半15分と後半25分の合計40分を観察させ、以下のような指示に従って、「教科の内容」「指導の方法」「生徒指導」の3つの観点から改善点を記述させた。

次に示すビデオは、〇〇先生（〇〇高等学校）による「平家物語」の授業です。この授業を見て、あなたが考える授業の改善点を、以下の3つの観点からそれぞれ2つ以上指摘してください。

##### 【授業の設定】

対象（学年）：〇〇高等学校 第1学年

単元名：「らしさ」考

本時の内容と設定：本単元は、「平家物語」の「敦盛の最期」（1次2時間）と「木曾の最期」（2次6時間）を比べ読みし、「武士らしさ」「女性らしさ」など「らしさ」について考える（3次3時間）。本時は、3次の第2時で自分たちの考えた「らしさ」についてプリントを読み、発表し合うまとめの活動を中心とした授業である。

「教科内容」については、実践演習前は「教材解釈」「指導目標」「授業展開」に関する記述が多く、それは実践演習後の記述も同様である。実践演習後に加わった記述としては、「学習者の発達段階」「学習者と教材との関連」「学習者の発言・意見に対する評価」「クラス全体での問題点の共有」など、「教科内容」中心の記述だけでなく、学習者との関連から教材研究や指導案・指導計画の改善を指摘する記述が加わっている。また単元目標の「らしさ」について、当時の社会の在り方との関係、社会と個との関係、「らしさ」の追究など、教材本文とその周囲に横たわる問題とを関連させて、学習者の思考を深めさせるような改善策についての記述も加わっている。

「指導方法」については、実践演習前は「授業の進め方」「板書の構造化」「発問や働きかけの工夫」「生徒に思考させる時間の確保」などについての記述が多く、その内容は問題点の指摘にとどまるものが多い。実践演習後はより明確な改善案を提示する記述が多く、「指名の明確化（誰に向かって）」「クラス全体への声かけ・指示」「学習者間の意見交流」「学習者の発言・意見に対する評価」「補助質問・助言の充実」などの記述が加わっている。総じて、実践演習前には教師の動きや発言に記述が集中していたのに対して、実践活動後は学習者の発言や活動にも目が向けられ、彼らの発言や活動に対する教師の配慮や働きかけに対する記述が加わっていると言える。

「生徒指導」については、実践演習前は「指導方法」と重なる記述が多く、「授業の進め方」「発問や働きかけ」「生徒に思考させる時間」についての記述、また「学習者への指示」「発言の問題点」について、その問題点を指摘する記述が多い。実践演習後には、一部の

受講生の記述に、「学習者の発言に対する肯定的評価」「個々の学習者に対する配慮・評価」「クラス全体の環境づくり」に関する記述があるものの、全体としては前後で大きな変化は見られず、また演習後には記述がない学生も散見される。

#### (5) まとめ

以上の結果から、今回の実践演習を経て、「教科内容」については、教材研究力を強化するとともに、学習者との関連から教材の研究や学習活動の評価を行おうとする視点が新たに獲得されているようであり、「指導方法」については、「指名の明確化」「クラス全体への声かけ・指示」「学習者間の意見交流」「学習者の発言・意見に対する評価」「補助質問・助言の充実」などの複数の視点が新たに獲得されて、改善策もより明確化されている。「生徒指導」については、一部の学生が「発言・意見に対する肯定的評価」「個別学生への配慮・評価」「全体の環境づくり」などの視点を獲得しているようだが、全体としては前後に大きな変化はうかがえなかった。

国語科の教職実践演習では、後半の第7回～第14回において教科教育・教科内容に関するフォローアップの授業を行っており、またその内容が指導案の改善を目標として、模擬授業を実施していないことも、「教科内容」「指導方法」の観点に関する記述が多く、「生徒指導」の観点に関する記述が少ないことに影響していることが考えられる。また今回の調査では高等学校の授業を観察の対象としたため、「生徒指導」の側面を特に取り出して指摘することが難しかったということも原因の1つとして考えられる。

今回の調査では、受講者は「生徒指導」の観点を獲得していること、しかし、それは十分に意識化されておらず、授業観察や授業改善の観点として確立できていないことが確認できた。今後は「生徒指導」の観点を意識させ、「教科指導」と「生徒指導」との関連を考えさせる活動を、教科の授業を観察・実施する際に取り入れるなどの対策が必要であろう。

(間瀬茂夫・佐藤大志\*)

## 6. 音楽科

### (1) 研究目的

音楽文化系コースの学生は、専門実技教育の経験から、指導者からの一方的な教授スタイルが当たり前であると考えている学生がほとんどである。これをふまえて、学校教育における教科指導においては、学習者の主体的な活動が重要であることを、生徒指導提要に記載されている生徒指導の3観点を提示することによって理解させている。したがって学生は、学習指導案を書いたり、模擬授業を行ったりするときに、教科教育の視点や生徒指導の視点を取り入れることは当然のことと思っている。しかし、昨年度の「教職実践演習」で明らかになった課題は、生徒指導の視点を重視しすぎると授業が音楽の本質から離れていく傾向にあるということである。このことは、教科内容の教員からの指摘で明らかになった。そこで本研究では、音楽文化系コースの「教職実践演習」において、教科教育の教員と教科内容の教員が協働することによって、教職・教科教育・教科内容の位置づけと関連性、及び3者のバランスの取り方を理解させ、その効果を検証することを目的とする。

### (2) 研究方法

「教職実践演習」第1回において、アンケートⅠ（「教科内容」「指導方法」「生徒指導」についての5件法による自己評価）と、アンケートⅡ（模擬授業の映像を見て、「教科内容

の観点」「指導の方法の観点」「生徒指導の観点」から自由記述で評価する)を行った。「教職実践演習」第15回終了後に、「教職実践演習」の成果に関するアンケート(「何が身についたか・何が成長したか」「授業評価の観点の変化・模擬授業実践にあたっての留意点)を行った。また、「教職実践演習」で第1回で用いた映像を再度見て、3観点から同様に自由記述で評価させ、それをもとにグループ討議を行った。

### (3)「教職実践演習」までに獲得された学生の資質・能力

表6 授業前に実施したアンケートIの分析結果

カテゴリ	診断項目	各項目平均	標準偏差	最大値	最小値	カテゴリ平均	カテゴリ標準偏差
教科内容	1 声楽に関する知識(発声法を含む)がある。	4.05	0.91	5	2	3.38	0.45
	2 正しい発声で、表情豊かに歌唱することができる。	3.68	0.89	5	2		
	3 ピアノ伴奏法に関する知識がある。	3.58	1.07	5	1		
	4 ピアノ伴奏の技能がある。	3.32	1.34	5	1		
	5 リコーダーに関する知識(奏法を含む)がある。	3.84	0.69	5	3		
	6 リコーダーの演奏技能がある。	3.89	0.81	5	3		
	7 ギターに関する知識(奏法を含む)がある。	3.37	0.83	5	2		
	8 ギターの演奏技能がある。	2.58	0.96	5	1		
	9 箏に関する知識(奏法を含む)がある。	3.47	1.02	5	1		
	10 箏の演奏技能がある。	2.89	1.15	5	1		
	11 指揮法に関する知識がある。	3.58	0.77	4	1		
	12 指揮の技能がある。	3.05	0.85	4	1		
	13 編曲・作曲ができる。	3.11	1.15	5	1		
	14 西洋音楽に関する知識がある。	3.89	0.74	5	2		
	15 民族音楽に関する知識がある。	2.68	1.00	4	1		
	16 日本の伝統音楽に関する知識がある。	3.16	1.01	5	1		
指導方法	17 指導の意図が明確な学習指導案を作成している。	3.47	0.77	4	2	3.64	0.18
	18 生徒の考えや意図を引き出すような発問をしている。	3.42	0.77	5	2		
	19 生徒の関心・意欲を引き出す指導をしている。	3.58	0.69	5	2		
	20 生徒の歌唱能力・歌唱表現を評価できる。	3.84	0.83	5	2		
	21 評価に基づき、生徒の歌唱能力を改善できる。	3.63	0.83	5	2		
	22 評価に基づき、生徒の歌唱表現を工夫させることができる。	3.63	0.83	5	2		
	23 生徒の器楽能力・器楽表現を評価できる。	4.00	0.75	5	3		
	24 評価に基づき、生徒の器楽能力を改善できる。	3.74	0.87	5	2		
	25 評価に基づき、生徒の器楽表現を工夫させることができる。	3.47	0.96	5	2		
	26 生徒の鑑賞能力を評価できる。	3.63	0.90	5	2		
生徒指導	27 音楽表現活動において、できたという達成感・自己有能感を味わわせている。	3.21	0.92	5	1	3.58	0.41
	28 生徒のよいところを見つけ、評価している。	4.16	0.76	5	3		
	29 「自分はみんなの役に立っている」と実感できる活動を取り入れている。	2.84	0.60	4	2		
	30 お互いのよさを認め合う活動を取り入れている。	3.37	0.68	4	2		
	31 お互いに学び合う雰囲気づくりをしている。	3.63	0.60	5	3		
	32 お互いの考えや音楽表現を共感的に受け入れている。	4.05	0.52	5	3		
	33 自分の意思、自分の考えで音楽活動する場面を取り入れている。	3.47	0.70	5	2		
	34 自分の考えをみんなの前で発表させている。	3.79	0.92	5	2		
	35 一人ひとりが活動に参加できるように、役割分担をさせている。	3.74	0.81	5	2		
	全体平均	3.51					

「教職実践演習」第1回に行ったアンケートIの結果が表6である。教科の内容:3.38, 指導の方法:3.64, 生徒指導:3.58, 全体平均3.51と、教科内容の数値が若干低いことがわかる。これは、ギターや箏の演奏技能や、民族音楽の知識の数値が低いことによる。これらの技能や知識をより一層向上させる必要があるだろう。一方、声楽やリコーダーの技能、西洋音楽の知識の数値は高く、音楽科授業における歌唱、器楽、鑑賞領域の主要な授業に関する技能と知識は獲得されていることがわかる。指導方法に関しては、どの項目も3.4以上の数値となっており、3.5以上の数値を示しているのが10項目中7項目ある。生徒指導に関しても、項目29以外は比較的高い数値を示している。特に、項目28, 31, 34, 35の数値は高く、共感的人間関係、自己決定の場の必要性を認識できているといえる。これらの結果から、「教職実践演習」にいたるまでの授業において、音楽科授業に関する主要



な教科内容、教科指導法、生徒指導の観点はほぼ獲得されているといえよう。

#### (4)「教職実践演習」における教科教育と教科内容の視点からの指導とその成果

音楽文化系コースの「教職実践演習」の教科に関する授業では、まず、第7回で音楽科授業に関する専門的知識（西洋音楽史、日本伝統音楽、作曲・編曲）のリフレクションとフォローアップ、第8回で音楽科授業に関する専門的技術（声楽、ピアノ伴奏、アンサンブル）のリフレクションとフォローアップ、という教科内容に関する授業を行った。第9回では、教育実習中に録画した映像をもとにグループ討議をし、教職・教科教育・教科内容の3つの視点から課題を発見させ、第10回では、その課題を克服できるような歌唱の学習指導案を作成させた。第11回から第14回では、4つのグループごとに模擬授業を行ったが、授業検討会では、教科教育学2名、教科内容学2名（声楽1名、作曲1名）の教員が協働し、それぞれの専門性に基づいた指導を行なった。声楽の教員からは、作品がもっている意義や芸術性を捉え、それを理解したうえで、心と身体を使って表現することの重要性が説かれ、作曲の教員からは、作曲家が意図しているものを作品の形式や和声からどう捉えるかが説かれた。それらをふまえて、音楽科教育の教員が音楽科授業における教科内容と教科教育と教職の視点のバランスの重要性を説いた。

「教職実践演習」第1回と終了後に視聴した、昨年度の「教職実践演習」における「花の街」の模擬授業は、音楽の諸要素や歌詞の内容から生徒に曲想を考えさせ、1番から3番までグループごとに表現の工夫をさせ、発表させるという内容である。視聴させたのは、授業者が歌詞の内容から「花の街」について学習者に考えさせ、意見を引き出したのちに、グループ活動をし、発表するという約20分の部分である。学習者の主体性を重んじた授業の流れとなっており、共感的人間関係の構築、自己決定の場の設定がめざされていることが明白な場面である。問題となる点は、歌詞の内容を表面的に捉えて表現の工夫をしていることである。特にグループBは、「踊っていたよ」という歌詞に基づいて、歌いながら皆で輪になって踊っている。授業者はそれに違和感を感じていない。つまり、「花の街」の本質を捉えていない授業となっているのである。

学生には、2回目の自由記述をさせた後、1回目の自由記述を配付し、比較検討させた。個人の意見では、1回目の視聴で何となくおかしいと感じていたことが、どこがどのように悪いのかに気づき、どう改善すべきかを考えるようになったという意見が多かった。その後4つのグループに分かれ、個人の意見をもとに討議した。主要な意見を抜粋したものが以下である。

##### 【Aグループ】

- ・授業というどうしても生徒の視点を第一に考えるが、それによって、楽曲の本質、本当に伝えたいことを見失ってしまうのはよくないことに気づいた。
- ・方法論の重視から、音楽が伝わっているかという視点へ変化した。
- ・単なる否定から、方向性を示す具体的な指摘をすることができるようになった。
- ・音楽の諸要素に集中しすぎると、音楽の本質を見失ってしまうことがわかった。
- ・間違った方向に陥った原因が、何となく見えてきた。生徒の活動を中心に授業を行うことから、楽曲を教えることの重要性に気づいてきた。
- ・子どもの興味を惹きつけることを、音楽以外の側面で行なっていた。音楽そのもので、惹きつけることが重要である。

##### 【Bグループ】

- ・主体的に活動させすぎると、作曲者の意図や、音楽の本質からずれてしまう。
- ・生徒が学んだことを他の曲でも活かす応用力の身につかせ方が重要である。

- ・方法論からの脱却ができた。
- ・どう工夫すれば良いか、なぜそのように工夫したのかという具体性が大事である。
- ・どうやったら曲の魅力を伝えられるかを着眼点にして、生徒主体か、教師主体かを判断する。

#### 【Cグループ】

- ・授業に対して、どのような姿勢で取り組めば良いのかという価値観が変わった。教材研究や音楽に対する心構えを考え直す機会となった。
- ・以前は、指導の方法や流れに意識が集中していたが、今回は指導の内容に意識が集中するようになった。指導する内容があつてこそその方法論であり、方法論からの指導内容では、生徒には何も残らない。
- ・歌詞に踊らされないようになった。日本語の詩の奥深いところを感じるようになった。
- ・楽曲分析的視点からもっと見なければならぬことが分かった。
- ・生徒の活動が浅くても、そこに踏み込んで音楽を深めていく方法が分かった。
- ・何よりも音楽の本質が大切である。

#### 【Dグループ】

- ・授業構成を考えると時の方法論と、音楽の内容や本質を伝えることのバランスの大切さに気づいた。
- ・音楽的な技術指導は生徒に分かるように工夫する。
- ・音楽とは何なのか、自分が音楽をする意味について考え、授業のなかでの「音楽」がどうあるべきなのかが考えられるようになった。
- ・明確な自分の理想の音楽科教師像が浮かんだ。

### (5) まとめ

共通して見られた点は、①方法論重視の考え方から、教科内容重視の考え方への転換、②音楽の本質を追究する必要性の認識、③主体的な活動と教科内容指導のバランスの取り方、等である。自分にとっての音楽の意義を見つめ直し、音楽科授業のなかで音楽の本質をどう追究するべきなのか、それを学習者にどう伝えるのかを再考する機会として、「教職実践演習」が有効に機能したといえる。その要因としては、教科教育と教科内容の教員の協働による授業運営が挙げられる。学生にとって、教職・教科教育・教科内容の視点で授業づくりをする、あるいは多角的に授業評価をすることは非常に重要である。また教員にとっても、自分の専門とする授業における課題を把握することができた。

一方で、次のような課題も残された。複数の意見に見られたように、学習者主体型から教師主導型への考え方の移行には注意が必要である。教科内容偏重への傾向は、従来の典型的な音楽科授業へ逆戻りする危険性をはらんでいる。生徒指導の視点が重要であることはいままでもない。表面的なグループ活動や言語活動が音楽科授業の本質を損なうことを考慮に入れたうえで、音楽科特有の「自己存在感」「共感的人間関係」「自己決定の場」を見いだすことが重要であろう。

(三村真弓\*・枝川一也)

## Ⅲ 教科における生徒指導：小学校と中学校・高等学校の違い

先に述べられているように、教科指導における生徒指導（文部科学省（2010）にならい、児童生徒いずれについての指導も、ここでは生徒指導と呼ぶ）は、大学生にとっては意識しにくい観点であろう。しかし、ここまで述べてきたように、教職実践演習の中で、教科における生徒指導についての理解がおおむね培われていることがわかる。

また、上の結果では、小学校と中学校・高等学校教員免許を取得する学生の教職実践演習の取り組みが報告されているが、教科における生徒指導について、その目的や意義が、小学校と中学校・高等学校で、大きく異なるわけではない。いずれの学校においても、教科における生徒指導の充実のためには、授業の場で児童生徒の居場所をつくること、わかる授業を行い主体的な学習態度を養うこと、共に学び合う意義と大切さを実感させることが重要である（文部科学省、2010）。ただし、その進め方において、学校種により、少なく

とも下のような違いはありと考えられる。

#### 1) 教科の内容や学習活動の違い

小学校に比べ、中学校・高等学校では、各教科の学業成績が重視される。しかも、学年が上がるほど、学習教科が増加したり、学習内容が難しくなったりする。したがって、中学校や高等学校における教科指導では、例えば共感的人間関係を育成することに重きが置かれにくいなど、生徒指導の優先度が低下している可能性がある。

#### 2) 発達段階の違い

発達段階が異なれば、教科の学習に対する態度の傾向は異なってくる。また、教師との関係性も変化する。例えば、教科における生徒指導の一側面に、児童生徒が意欲的に学習に取り組めるような指導があるが（文部科学省，2010）、学習意欲は発達段階によって異なる傾向がある。桜井（1997）が指摘したように、学習意欲の源となる有能感は、年齢の増加とともに減少する。また、小学生のほうが中学生より、授業の内容や学習活動の形態の工夫から影響を受けやすいという報告もある（林・橘，2007）。したがって、どちらかといえば中学校や高等学校において、教科における生徒指導の効果が得られにくいと考えられる。

#### 3) 学級担任と教科担任

生徒指導提要（文部科学省，2010）でも指摘されているように、学級担任による指導が基本になっている小学校では、教科指導の中での生徒指導は比較的進めやすい。教科担任によって指導されている中学校や高等学校では、他の教師との連携が必要になってくる。中学校や高等学校の生徒にとっては、教師との心理的な距離が遠くなったり、親近感を覚えにくくなったりすることもあるだろう（前田，2014）。そのため、小学校のほうが、教科指導の中に生徒指導が自然に位置づきやすいといえる。

これらの違いを考えると、中学校・高等学校においては、教科指導に生徒指導の側面を取り入れることが、比較的困難であるとみなされやすいはずである。一方、小学校においては、むしろ、生徒指導の側面が授業の中に自然に取り込まれ、生徒指導とは意識されにくい場合が多いかもしれない。

しかし、いずれの学校においても、教師たちが生徒指導と意識してはいない多くの活動が、実は生徒指導の機能を持っている。教科の指導中の教師の行動、何気ない言動や表情、態度が、日常の生徒指導における重要な要素であることは間違いない。（森田愛子\*）

## IV 研究の成果と今後の課題

初等教員養成系の研究から明らかになったこととして、以下が挙げられる。事前の自己評価では、教科内容に関する知識・技能がやや低く、事後もそれほど向上していない。逆に児童指導の視点は事前から高い数値を示しており、事後も向上が見られることから、そのような視点が事前から養われているといえる。一方、指導方法に関しては、事後で数値が上がったり、自由記述が増えたりした教科もあり、演習の成果がある程度示されている。初等教員養成系での「教職実践演習」では各教科ともに1コマしか授業が設定されていないという事情もある。受講者の教員としての資質を向上させるためには、「教職実践演習」を履修する段階までに、教科内容の授業を充実させる必要があるだろう。

中等教員養成系の研究から明らかになったことは以下である。いずれの教科においても、

教科内容に関する知識・技能に関する自己評価は事前でかなり高く、事後もさらに向上している場合が見られる。また教科指導に関しては、事後で一定の向上が認められ、演習の成果が示されている。しかし、生徒指導に関しては、事後において指摘は見られるものの、受講者は自身の向上をそれほど感じていない。生徒指導の観点を授業づくりや授業評価に取り入れることの意識はあるものの、その能力の向上は「教職実践演習」の限られた時間内では十分ではないといえる。「教職実践演習」を履修する段階までに、それぞれの教科教育の授業において生徒指導の観点を積極的に取り入れるべきであろう。一方、音楽科に見られたように、生徒指導の観点を取り入れることを重視しすぎると、教科内容の本質から外れていく傾向もあり、両者のバランスを考慮する必要性を指導することも大切である。

本研究によって、教員養成課程の授業における教職・教科教育・教科内容の3者の連携の成果が明らかとなった。教科教育と教科内容の教員が協働し、教職の視点を取り入れることの必要性を共通認識することによって、教育現場により即した教員としての資質を学生に育成する可能性を見いだすことができた。また同時に、教科教育の教員は教科の本質を問い直すことができ、教科内容の教員は自身の授業を教員養成にどう活かすのかという道筋を見つけることができた。今後は、各教科の本質に沿った生徒指導の具体を明らかにし、その知見を教員養成課程の授業に活かす必要があるだろう。(三村真弓\*・網本貴一\*)

## 注

- 1) 中央教育審議会 (2006.7.18) 「今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)」 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm))
- 2) 文部科学省や日本教育大学協会では、教科専門という用語を用いているが、本稿では、引用部分以外は、教科内容という用語を用いる。
- 3) 日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクト (2007.3.31) 「教員養成カリキュラムの到達目標・確認指標の検討ー中学校教員養成における〈教科〉の在り方を中心にー」 ([http://www.u-gakugei.ac.jp/~jaue/\\_userdata/94\\_no54.pdf](http://www.u-gakugei.ac.jp/~jaue/_userdata/94_no54.pdf))
- 4) 中央教育審議会 (2011.10.11) 「教員養成の段階で修得すべき内容について」 (教員の資質能力向上特別部会基本制度ワーキンググループ第3回配布資料), p.7 ([www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/.../1312531\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/.../1312531_01.pdf))
- 5) 鳴門教育大学コア・カリ開発研究会編著 (2006) 『教育実践学を中核とする教員養成コア・カリキュラムー鳴門プランー』 暁教育図書  
三大学研究協議会編 (2011) 『教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域に関する調査研究』 上越教育大学

## 引用文献

- 文部科学省 (2010). 生徒指導提要 教育図書
- 桜井茂男 (1998). 学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる 誠信書房
- 林 清美・橘 良治 (2007). 児童・生徒による教師影響力の認知 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, 56 (1), 193-204.
- 前田健一 (2014). 第2章 第1節 青年期の発達の特徴 森田愛子 (編) 生徒指導・進路指導論 協同出版 pp.45-65.